

狛江の地蔵信仰Ⅱ

平成14年3月29日発行
狛江市和泉本町1-1-5
電話 (3430) 1111

Ⅳ 辻の地蔵

① 駒井の北向き地蔵

かつて登戸道の名のあった駒井大通りの四つ辻の一角（駒井町三丁目）には、小さなお堂のなかに坐像の地蔵尊がまつられています。通りに北面して安置される地蔵は、北向き地蔵とよばれ、とくに子どもの夜泣きに御利益があるというので、夜泣き地蔵ともいわれていました。

古い台石の上に据えられて、口元に紅をさし額に紅で白毫をつけた石造丸彫りの地蔵は、昭和50年ごろの造像で、堂前右手に東向きに置かれた古像が、江戸時代の造立によるものです。車の事故で堂や地蔵像が損傷したため、登戸の石材店に頼んで新像が造られました。

ここに地蔵尊が初めて造立されたのは、台石右側面の紀年銘によれば寛政5年（1793）10月で、左側面に刻まれた願主は、武州多摩郡駒井村の秋元磯右エ門、高橋三右エ門、それに念仏御詠歌講中。そして台石正面には、「天下泰平国土安穩 奉造立地蔵大菩薩 五穀成就萬民快樂」と、3行の銘文が刻まれています。高橋三右エ門の流れをくむ、高橋家当主の賢二さんによると、三右エ門は5代前の人で、「お地蔵さんは、うちの先祖のおじいさんと、秋元総本家の磯右エ門というおじいさんが、西国三十三番札所へ行った記念にこしらえた」と、父親の三五郎さん（明治36年生）から聞いたということです。このような言い伝えから、秋元・高橋両名の札所参詣という回国記念供養に、駒井の念仏御詠歌講中の人たちが協力して、地蔵尊を造立したことが知られます。

新旧2体の地蔵像には花などが供えられ、堂内には盆の施餓鬼会の「北向地蔵尊」供養の塔婆が納められています。施主は、この地蔵堂の地所に隣接する「地蔵園」とよばれる植木屋さんで、やはり高橋氏。前にあげた高橋賢二家とともに、この地蔵尊の主守り（管理）をしてきました。

北向きにまつる地蔵は、めずらしいので、霊験あらたかな地蔵さんだといわれ、子どもやお産のことをお願いするとよく聞いてくださり、とくに夜泣きにはよいとされて、遠くからもお参りにくる人がありました。戦後、昭和23年、長女を出産して夜泣きに悩まされたとき、姑に言われて一週間、毎日毎日、北向き地蔵さんにお参りし、お礼には絵馬をあげたという人もいます。交通事故で堂や地蔵像が損傷したとき、車を運転していた人には、けがもなかったので、お地蔵さんのおかげだということにもなったそうです。いまでは、何事によらず無事息災を願って、参る人が多いといえます。

② 猪方一丁目の辻の地蔵

猪方の石井貞男さん宅のブロック塀の一角に、道路に面してまつられる地蔵像があります。像高は50cm足らず、右手に錫杖、左手に宝珠という、浮彫り立像で、わずかに光背が遺されています。江戸時代の造像と思われそうですが、年代は不詳。

丁字路の辻にあたるこの場所のあたりは、道路拡幅前には道のふちに茶の木が植えられ、茶の木の茂みを背にして地蔵尊が立っていました。辻の地蔵さんは道しるべにもなっていたといえます。若い衆が、力石を担ぐように、辻の地蔵さまを担いでみることもあったそうです。

平成3年の道路拡幅工事で元の居場所がなくなった地蔵像は、近所の人たちなどの頼みもあって、しばらくの間、石井家の庭に置かれていましたが、塀を造るにあたって、その一角に

設けた壇に安置されることになったのです。遷座の際には、近所の数人もあつまって、前々から地蔵像の安置の場所など地蔵像の扱いなどについて助言を受けていた、石井家の檀那寺である泉龍寺の住職に、供養をしてもらいました。

ブロック4個を外して造った壇は、前面を黄褐色のタイルで細くふちどりをし、地蔵像はその奥に据えられて、花なども供えてあります。路傍の地蔵尊が、道路事情などによって失われてゆくなかで、この辻の地蔵さんは、安住の場を得たようです。近辺の10軒ほどの家の人たちは、今も昔からの習わしどおり、盆の迎え火と送り火を辻の地蔵さんのところで焚いています。

この地蔵尊も、北向き地蔵ということで、お参りにゆく人があるそうです。

③ 西野川の辻の地蔵

西野川二丁目の丁字路の一角に、広がる畑を背にして、大小2体の地蔵尊が立っています。江戸時代からのものと思われませんが、土台の石に刻まれた紀年銘から造立年代の明らかなのは、像高(45cm)の低い地蔵のほうで、寛延4年(1751)、念仏供養のために造立されたもの。丸彫り立像の2体の地蔵尊は、狛江市内では、ひときわ目に立つ辻の地蔵さんです。

右手に錫杖、左手に宝珠をもつ2体の地蔵像の足もと近くには、数年ほど前から、水子供養にみられる小地蔵や豆地蔵などが何体も置かれるようになりました。これは、水子供養を祈願する人たちがあげたものと思われまゝ。ここのお地蔵さんを水子地蔵とでも思ったものか、とくに2、3年前には、豆地蔵などがたいへんな数になったことがあったと聞きました。

地蔵尊をまつるこの場所は、富永家の持ち地の一画で、山角型の馬頭観音や庚申塔も並んでいます(2基ともに大正10年の建立で、願主は富永広吉)。

[付] 辻や道端に遺されている石造物には、地蔵像と庚申塔も多く、いまもその両者が見られるところは、市内に数カ所あります。そのなかの一つ、和泉本町の松原庚申堂の前に立つ地蔵尊も、年代は不詳ですが、念仏講供養のために造立されたものです。

V 百地蔵まいり

幼い子どもを亡くしたときには、百地蔵まいりといって、百体の地蔵にお参りして供養することも行われていました。狛江でも、戦前、昭和の初めころまでは、みることのできる信仰習俗だったようです。小足立(西野川)の富永佳一さん(明治26年生)から、百地蔵まいりについて、次のように聞きました。

小さい紙に「南無地蔵尊」と書いたものを百枚こしらえ、地蔵さまにお参りして1枚ずつ貼って歩く。それを百地蔵とか百地蔵まいりなどといっていた。子どもが死んだとき、いつだっていいから、方々のお墓の地蔵に貼って歩く。子どもの供養と思ってやったんだね。そうすることが、子どもの供養になる。子どもがひとつかふたつで死んだときなんか、やってたんだね。

子どもを亡くしたので、百地蔵まいりに行ったのは、関東大震災より前、大正10年ころだったという人もあります(猪方 明治30年生 女性)。今とは違って、乳幼児の死亡率も高かったもので、幼い子どもを亡くした人もまれではなかったのです。お地蔵さんに百地蔵まいりの紙札が貼ってあるのを、時には見かけることもあったそうです。墓地には、丸彫り立像の地蔵像のほかに、地蔵を浮彫りにした墓碑も少なからず見られます。百地蔵まいりには、狛江以外の地域にも出かけたものでした。紙札は貼らず、できるだけ数多くのお地蔵さんにお参りすることもあったようです。

(狛江市文化財専門委員 中島恵子)